凛トシテ咲ケル花ヲ愛シ・・・

星沢青嵐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
凛トシテ咲ケル花ヲ愛シ・・・

【Ｎコード】
Ｎ６８６８Ｗ

【作者名】
星沢青嵐

【あらすじ】
楓と領主さまの、静かな恋物語。すれ違う心と心。互いに理解し合っているからこそ、傷つけ合ってしまう…純粋に恋する花のように、楓は乙女になっていく……

春深ク月明リノ下ニテ

月夜のこと。
春の冷たい風が頬を撫で、心地よい静けさに包まれた草原の中、1本の大きな木の下で、藍色の着物を着た美しい女が子守唄を歌う。
その女の名は、『楓(かえで)』という。
誰かのためではなく、自らのために子守唄を歌うのは、ここ最近寝れていないからだ。
戦続きのこの乱世に生きるため、楓は忠誠を誓う領主さまのもとで昼夜問わず働きづめなのだ。

この場所は、楓と領主さましか知らない。いつも誰もいないので楓にとっては唯一一人になれるところとして毎日のように来ている。
楓は小さくとも由緒ある家の一人娘だ。領主さまの家とも深い関わりを持っており、楓は生まれてからずっと領主さまのために生きるように教えられてきた。
そして、領主さまの許嫁である。
許嫁ともなれば、この時代の女全員がうらやむことだ。しかし、楓はあまり乗り気ではない。

領主さまのために死ぬことも惜しまないのだが、嫁になると、今までのように領主さまのために生きていいのかわからなくなりそうだからだ。
もちろん、領主さまのが嫌いというわけではない。むしろ好きで好きで仕方ない。領主さまも愛していると言ってくれている。
それでも信じられないのだ。正室に招いていただいているのだが、領主ともなれば後継ぎをつくるために側室をとる。今のところいないのだが、いつか、と思うとどうしようもない嫉妬心が生まれてしまう。

自分のために生きてこなかったので、その嫉妬心に身を任せ領主さまに意見することもできず、腹の底で膨れ上がる黒いものを吐き出すことができない。
このまま正室に入っても、自分を殺し、今までより感情を外に出さなくなり、領主さまに嫌われるだろう。そう思うと自ら命を断とうとさえ考えた。
それではいけないと分かっている。だから、正室の入るのを伸ばし、１６の現在に至る。

領主さまが寛大な方でよかった、と心から感謝する。
そうでなかったら今ごろ自分はここにいないだろう。命を絶ち、死を選び、この場所にも来ることはなくなる……考えられないことだ。

正室にならなくても、領主さまの傍にはいたい。傍で、お力になりたい。その願望は強かった。
幼いころから神童と呼ばれ、学問や音楽、詩や茶、すべてにおいて完璧で、武術や馬術でさえも武士を超えるものだった。
そして、神のお告げを聴くことができる耳をもつ。
それを活かして領主さまのお傍で働いているのだ。

今の関係に不満は無い。
それでも、人間の本能なのか、はたまた自分が気づいていないだけで実はそうしたいのか、もっと深い関係になりたいという衝動がおさえられなくなりそうになる。
静かに自分を抑えるのだが、どうしても無理なときは、すぐさまその場から立ち去るようになった。
これからもそれが続くのだったら、楓は自ら戦場に出ようと決意している。兵として戦場で散るのならば、領主さまも自分のことを

忘れはしないだろう。
これは独占欲だ。自分の中にため込まれた嫉妬心が積もり積もって生まれた感情。
それほど、楓は領主さまを愛しているのだ。

夢ノ影ヲ追イカケ

「政之(まさゆき)様、楓にございます」
「入れ」

楓はゆっくりと部屋の中に入っていき、深々と頭を下げる。
中には整った顔の青年が書物に目を通している。
その人物こそが、若き領主の政之だ。

「楓、何か用かい？」

しばしその美しい顔に見とれていた楓は、ふと我に返り持っていた書を手渡す。

「この書を渡すよう、柴乃(しの)さまに……」
「ありがとう」

微笑むその姿は、この世の女なら誰でも恋に落ちるような美しさをもつ。
それにしても、と政之は書から目を離す。

「姉上も人使いが荒いな。楓は疲れているのに……」
「そんなッ……私はとても元気ですので、気を使われなくても……」
「違うよ。気なんか使ってない。心配してるんだよ…？」

楓の頬を優しく撫でる。触れられた場所からほのかに紅く染まる頬。楓はとても恥ずかしく逃げたいとすら思ってしまった。
それでも、離れたくもないもので……

「あの…ッ。触れ……っ」
「……あぁ、ごめん。楓は触れられるのが嫌いだったね」
「いえ…」

ぱっ、と手を離し、寂しそうに笑う政之。愛おしそうに楓を見る目は、とても領主には見えず、ただの男に戻る。

「では、私はこれで……」
「まって」

部屋から下がろうとした楓を引きとめ、じっと目を見、政之は優しく言った。

「まってるからね。ずっと…」

ずきん、と心が痛むのがわかった。楓もできることなら、離れたくはないのだ。

「……はい」

静かに言い、部屋から出る際、振り向くと政之の悲しげな瞳が美しく、またも楓の心が痛む。

花ノ蕾ニ心ヲ奪ワレル

「…ですから、私はまだッ！」
「何言ってるんだ！政之さまは待っているんだ！これ以上お待たせしてどうする！」
「私はッ！まだ心の整理がついていないのです！このまま正室に入っても…」
「入っても、何だ。聞くだけきいてやる」
楓の父、兼敬（かねよし）は気難しい人間だ。
正しいことを信じ、過ちや悪を憎んでいる。
楓は兼敬を苦手としている。自らの父とて、合わないものは合わないのだ。

「私は、今正室にはいっても、駄目だと思うのです。
自分を殺してしまいそうで、怖い。だから、父様、分かってとは言いません。
しばし、時間をください」
頭を下げ、涙を浮かべながら必死に訴えるのだが、兼敬がそれで許すことはない。
「お前は分かっているのか？政之さまはもう１８だ。正室などすでに持っているべきなのだぞ！
政之さまはお優しい。だからこそ！もう待たせることはできないんだ！」
「わかっています…。そんなこと、痛いほどわかっています。
それでも、私は……」

自分のためで、政之さまに迷惑をかけていることは分かってる。だからこそ、譲れないのだ。

政之は自分を愛していると言った。ここで待っていると言ってくれた。

それなのに、自分が心の整理がついていないのに正室に入るのは、裏切っているのも同然だと考えている。

ここで、曲げるわけにはいかない。

「私は政之さまが好きです。愛しています。政之さまのためならば、何でもできます。

だから、裏切るようなまねはできません」

きっ、と強く兼敬の目を見て言った。

「父様が私を無理に正室に入れるようなら、私は自害します。

それほど、政之さまを愛しているのです」

流石にこれには兼敬も言いかえせなかった。

これほどまでに娘が強く言っているのだ。認めざる負えないだろう。

静かな時が、なんとかしてくれるのを待つとしよう。

ツマ先マデ貴方ノ為ニ

「…今のところ、まだ攻めてくるような動きはありません」
「そうか…ありがとう。この情報は掴むのが大変だったろうね。下がっていいよ」

すっと、政之の部下、禾原威志（のぎはらいし）が下がる。
威志は政之が家督と継ぐ前に部下となった。政之の父、政誠（まさのぶ）が直に威志を部下に迎えたいと言ったのだ。
知・武共々申し分ない才能を持ち、先々代と交流があったために、戦を嫌うがゆえその世界から身を引いたのだが、政誠の申し出を快諾した。
政之が家督を継ぐことになったのは、威志の後押しがあったからとも言える。
病に倒れた政誠が隠居することになった。すると自然に後継ぎをどうするかという話になったのだが、政之はそのときまだ１６。どうしても反対する者が出てきてしまう。
そこを威志が後押しした。
反対する者を集め、その前で、

『この方は、民を治めるために必要なものをすべてお持ちになられておる！
政誠さまもこの方に継がせる気だ。お考えに添おうではないか！』

と。
政之にとっては恥ずかしい以外の何物でもないのだが、それでも信頼されていることが嬉しかった。

威志は楓と仲がいい。互いに兄妹のように思ってよく話している。

心を開くことがあまりない楓にそのような者ができたことは政之もとても喜ばしいものだったのだが、どこか寂しい気もした。
そして、嫉妬心も――――――――――――

自分にさえあまり心を開かないのに、どうして威志は、どうしてどうしてどうして……
そう思い始めると止められない。嫉妬で埋め尽くされるのは何が何でも抑えなければならない。
楓に愛されたいと、好かれたいと思うのだ。嫉妬心に操られ、身を任せたら自分が何を仕出かすかわからない。

楓が正室に入るのを待ってほしいと言ったとき、心のどこかでほっとした。
もちろん傍にいたい。ずっとずっと、傍においておきたいと思っているのだが、自分の嫉妬心をどうにかしたいと思った。
それからというもの、楓は政之の部下として働くようになった。
それがまた苦しくなった。
自分が楓の自由を奪っているのではないか、無理をさせているのではないか、と。

楓のためなら何でもしようと決意している。
たとえそれが自己満足だとしても、楓を守って見せる。

そう決めたのは、ずっと幼いころ。
楓と出会ったときだ。政之は楓を一目見た瞬間、好きになったのだ。
許嫁になると聞かされたとき、心の中でふつふつと湧き上がる喜びを感じた。それと同時に、守ろうと思った。
楓の瞳に、暗い影があった。それを取り除いてやりたいと思ったのが、今につながる。

「つま先まで、貴方のために……」

ある日楓が言った。

その言葉は自分が守れていないからで、いらぬ心配をかけていると心に突き刺さった。

それでも、愛しているのに――――――

二人はすれ違い、まだ心は出逢えていない。

密ヤカニ愛ヲ誓ウ

空が、蒼く蒼く澄みきっている。
桜の花がその蒼に映えて美しいのだと侍女に聞かされ、威志に気晴らしに見てきてはどうかと言われたのだが、どうにも政之は桜を見る気にはなれず部屋の前の庭で考え込んでしまった。
というのも、最近は心配ごとが増えてきているからだ。
昨日は威志が攻めてくる様子はないと言っていたが、隣国、白谷国の怪しい動きが部下の中ではもっぱらの話題になっているし、そもそもその国から突然同盟の申し込みがあったことがことのはじまりだ。
元々隣国は戦ばかりやっているのでこの国とは仲が悪い。戦を仕掛けてくることもあった。それ故に今回の同盟の申し込みはなにか良からぬことを考えていないかと慎重になっているのだ。

「大変だな……どうにかしないといけないのは分かってるんだけど」
ため息交じりに呟く。そういうことがあることを含めて家督を継いだのに、こんな状態では父に申し訳ない。

「あの…、どうかいたしましたか…？」

ふと後ろから楓が声をかける。少しだけ驚いた政之だが、そのあとに話しかけてきてくれたことが嬉しく思えた。楓が話しかけることは仕事関係だけであり、それ以外は政之から話しかけていた。
喜びを必死に抑え、いたって平常心を装い振り返る。

「何でもないよ。少し考え事をしてただけだから」
「そう…ですか。…私に出来ることがあればっ…言って下さい！

ただでさえ幼く見られる楓がそう言うと、とても可愛らしく政之の独占欲が湧き上がる。
政之は楓に悟られないようにぐっと堪え微笑んで、
「ありがとう。でも楓も色々大変だろう？気持ちだけもらっておくよ」
楓の頭を撫でてやった。
顔を朱らめ恥ずかしそうにしている楓だが、嬉しそうでもある。
「…私は、大丈夫ですので…本当に、何かあったら言って下さい！たとえ戦うことになっても…私は大丈夫ですから…っ！」
そう言い残して逃げるように去って行った。
「…ははっ」
一人政之は笑った。楓の可愛らしさと、自分が心配をかけてしまっていることに対してだ。
「よし、頑張らないとな」
意気込んだはいいが、さてどうしようかと何も浮かばない。
仕方なくさっき見なかった桜を見に行こうと中庭に向かった。
蒼い空に、薄紅の花弁が舞い踊る。

運命ハ我ヲ不幸ニシ

「隣国、神谷からの同盟申請は拒否する。それにより起きると思われる戦の準備は只今より開始する。以上」

政之が言い放った。集められた家臣たちは、予想外の宣言に動揺を隠せない。その中で、威志と楓だけは冷静に政之の目を見る。威志は政之がどのような考えでこれを決意したかわかっているのだろう。宣言を聴いたあと、静かに頷いたのだった。

「不服な者もいるようだな」

いつもの穏やかな口調とはかけ離れた政之の低い声がざわめきを制する。無理もないだろう、と政之はこの決断に行き付いた事の顛末を説明する。

「予測でしかないが、神谷はこちらが同盟を拒否することを前提に申し出たのだろう。それでなければ我が国に同盟など申し出るはずがない。同盟を申請することによって暫くは油断すると考えた。たとえこちらが申請を受け入れたとしても、同盟相手から戦が仕掛けられることはないという思い込みを利用しこちらを攻めてくるはずだ。

あえて拒否して戦をした方が被害が少なくて良い。拒否するのは出来るだけ戦準備が終わってからだ」

実際、神谷はそういう騙し打ちをよく使う。政之の考えは家臣の疑問を無くした。

軍議は終わり、皆が下がっていったのを見計らって威志と楓は政之にある重大な問題を抱えていることを言った。

「裏切りの可能性があります」

楓が言うには、家臣の中に神谷と手を組もうとしている者がいると兼敬が伝えておけというものだった。

兼敬はあまり政之に会おうとしない。それは、兼敬が政之に期待しているからだ。あえて会わないことで兼敬の情報網からの情報を使っていないと他国に思わせ、政之の思い通りに事を動かせるように裏で情報操作しているのだ。

「兼敬殿が、そう言っていたのかい？」

穏やかな口調に戻っていて、この二人を信頼しているのがわかる。

楓は無言で頷き、兼敬からの伝言を細かいところまで政之に聴かせる。

「戦が早まるかもしれないね…」

予想外な情報は、聴きたくないものだった。また頭が痛くなるような話しが入ってきた。

「政之さま、この件は私に任せては頂けませんか」

「楓に？」

「はい。私はその方とちょっとした関わりを持ったことがあります。父と会いにいったことが」

「そうか…でも、危ないかもしれないよ」

「それならば、この威志がともに」

思いがけない威志の発言。楓は一人で事にあたろうとしていた。

「威志が一緒なら、大丈夫だね」

本心では全力で却下したいところだが、一刻を争うことになるはずだ。ここは任せるしかなかった。

「楓、威志、頼んだよ」

これから大変になるのだと、改めて楓は思った。

戦ノ世デ光ヲ探ス

「威志さま、手合わせをお願いできませんでしょうか」
「いいだろう。楓がどれほど強くなったか気になっていたところだ」

戦準備の合間に、楓が威志に手合わせを願うのはもう見慣れたものになっていた。初めのうちは、威志の強さを誰もが知っているのでなんてことを言っているのだ、と他の家臣によく言われたものだ。
しかし、楓も負けてはいない。踊るように軽い動きとは裏腹に、力強い攻撃で、威志も一度倒されかけたほどだ。

今回の戦に威志と楓は参戦しない。裏切りの可能性を潰すために、二人はまず神谷に行き、そのあと家臣の城を一つずつまわる。
城を一つずつまわるのは、一見面倒なことだが、裏切りをなるべく遅らせるためにわざとするのだ。

「赤井殿、審判を願いたいのだが」
「はっはい！」
「よろしくお願いします」
「では……始め！」

合図を聞いた瞬間、威志が楓に切り込んだ。楓は軽々と避け、攻める。激しい攻防が繰り返され、刀と刀がぶつかり合う音が辺りに響き、それを聞いた者たちが周りに集う。その中に政之までもがいた。
木刀でやればいいのに、と政之は思ったが、あえて何も言わずに手合わせを見守る。

カキィィン――――――

刀がぶつかり、競り合う。
そして勢いよく楓が威志の腹めがけて蹴りを入れる。威志は少しも動じずに冷静に後ろに逃れ、体勢を崩さず楓へ刀を向ける。威志が小さく笑ってみせると、楓は静かに目を閉じ精神を統一させる。静かな覇気が満ちて、肌をさすような気さえした。
目を開いたと思うと、次に姿をとらえたのは威志の背後だった。そのまま峰打ちで脇腹を狙って刀を振る。と、威志が楓の左腕を引き前のめりになった体を後ろに倒した。楓の刀が手から落ち、体勢を崩し倒れた。

「そこまで」

体勢を正し、切り込もうとしていた楓の肩を支えながら、政之が止める。
威志は政之に向かって礼をし、刀を鞘に戻して楓のもとへ歩み寄り、楓の刀を拾い上げた。

「政之さま…」
「楓、見ていたよ。前よりも格段と強くなっているね。一度俺と手合わせしてくれないかい？」
「そんなっ……政之さまに刀を向けるなど…」
「冗談だよ。楓が強すぎて俺が負けてしまう」
「そんなことっ…」

楓が戸惑うなか、政之と威志が笑う。周りに集まっている者たちも笑った。

「楓、強くなったな」
「威志さまも、相変わらずお強い。私など足元にも及びません」
「いや、もうすぐ楓に越される。もっと精進しなくてはならない。

若い者にはまだ負けられないな」

そう言われ、楓もふっと笑った。

戦前に、皆が笑い、このままこの時間が続けばいいと、不覚にも思ってしまった。

生ト死ハ彼ガ決メル

楓の戦い方は、とても新しいものだ。
これまでの戦い方は、刀ならば刀、体術ならば体術のみで戦うものだった。
しかし、その全ての技を混ぜ合わせ、ひとつにしたものが楓の戦い方だ。
もっとも、楓はその戦い方を威志から学んだので、一番初めに編み出した威志のほうが真髄といえよう。

対して政之は、刀を自由自在に操り、相手を翻弄するような動きで戦う。
素直に攻める時は攻める楓とは違い、攻めると思わせておいて予想外な動きをする政之のほうが、戦って勝てるだろう。
時として素直さは逆手に取られ、時として策を練って作られた戦いは裏を読まれ使い物にならなくなる。

政之は思う。完璧な戦い方なのないのだろう、と。そして、それ故に最も強いといえるものが居なく、国単位で戦をしているのだろう。

そんなことを考えながら、政之は楓の頭に手をのせる。撫ったそうにしているのを見ると、何としても間者探しなどさせたくないと思ってしまう。
威志だって、温厚な性格なのに、強さと頭の良さのおかげで戦をすることになったのだ。巻き込まれるものも、少なくない。
国主だから、という理由で無理やりに戦に駆り出す領主もいるだろう。あの、神谷のように。
正直、戦などはしたくない。政之だって、戦は嫌いなのだ。

「政之さま…？どうかなさいましたか…？」

はっと我に返ると、楓が心配そうに顔を覗き込んでいる。

「なんでもないよ。少し考え事をしていただけさ」

微笑んで返すが、心配そうなのは変わらなかった。

どこまでも自分は楓に心配をかけているのだと、また自分が不甲斐なく思える。

「戦は、本当に必要のないものだよ。楓も、威志も、みんなすまないね。勝てとは言わないよ。ただ、必ず生き残って」

その場にいた皆が静かに頷き、『生きる』と決意した。

同時に、政之が何よりも先に家臣に『生きる』ことを命じることに器の大きさを感じた。

この人についてきてよかった、と誰もが思うのだった。

「楓、威志、君たちはとても難しい仕事をしてもらうから、何かあったらまず生きることを考えて。生きていたら他に出来る事を見つけることができるけど、死んでしまったら元も子もないからね。勝手に死ぬことは許さないよ。ここにいる皆は、俺の家族も同然だからね」

「私は…政之さまのために生きていますから。死ねと言われない限り、生き続けてお役に立てるよう、働きます…！」

はにかんだように笑いながら、楓は言う。

存在ヲ認メル者ガ居ルダケデ

「威志、ちょっといいかい？」
「はっ」
「楓を、頼んだよ」
「…この命に代えてでも」

皆が去った後、政之が威志に言った。
戦に楓が出るたびに、この言葉を聞いている威志は、政之が言わずとも分かっている。政之はいつだって楓と民（たみ）のことだけしか考えておらず、家臣や民のことを一番に考え、自分のことなど後回しどころか一切気にしない。
そんな政之だからこそ、威志はここまでついて来た。
戦を嫌う者は多いだろう。しかし、天下取りを狙うものも多い。戦は仕方ないことだと妥協することもなく、しなくてもいい戦はしない政之は、威志にとって大切な人間だ。

「そうだ、楓に後で来るように言ってくれるかい？」
「分かりました」

了解し、政之の前から下がった。

「楓、政之さまが後で来いと言っていたぞ」

仕度をしていた楓に、先ほどの伝言を伝える。

「分かりました。お伝え頂き有難うございます」

にこやかに礼を言う楓は、威志にとって妹のようで可愛い。

楓はその笑顔を見た者が皆恋に落ちるような容姿をしている。その上、博愛主義者と言ってもいいほど優しく、気がきく娘だ。きっと、ひと目見ただけでは誰も楓が戦に出ているとは思わないだろう。

「威志さまは、なぜ政之さまに仕えようと思ったのですか？」

楓は威志が仕えはじめた頃のことを知らない。威志が言おうとしなかったこともあるが、楓にもあまり必要な情報ではなかったのだろう。

「政之さまの器の大きさに感心したからだ。楓もそうだろう？」

「はい！私は、政之さまに救われたようなところがあるので、その優しさに惚れました」

惚れた、と恥ずかしげもなく言うのは楓らしい。

好きでいることを恥じる者も多いが、楓曰く好きになるのは自然の摂理だという。人間の本能であり、好きなひとはそれほどまでに素晴らしい人間なのだ。

「威志さまは、すごいですよね。１６のときに政誠さまが直々に…」

「俺は戦は嫌いだ。そんな奴にすごいと言うものではない」

「でも、私にとって、威志さまは兄のような存在です。今だって、２８で政之さまを支えるなんて、尊敬します」

「楓、お前も政之さまにとってかけがえのない存在だ。お前も支えているのだよ」

「そうだと…嬉しいです」

威志にとって楓は妹のような存在。楓にとって威志は兄のような存在。

それは多分、これからも変わらないことだろう。

我ノ心ハ癒サレル

楓が政之の部屋へ行くと、政之が不安そうな顔をしているのを見てしまった。ほんの一瞬だが、なぜだかそれが自分のせいに思えて、部屋に入るのが躊躇われた。

しかし、ずっと部屋の前にいても始まらないので、声をかけ部屋に入って行った。

少しだけ開かれた襖の前にひざまずき、声をかけると、政之はいつもと変わらぬ様子で入れと言った。

「仕度途中だったろうに、呼び出してすまないね」

「いえ、もう終わるところだったので…」

楓を気遣う政之は、穏やかな笑みを浮かべている。

変わりない様子の政之を見て、少しだけ安心するも、違和感が生まれた。

おかしい。なにかが、いつもと違う。

何も無いんだ、と自分に言い聞かせて、楓は気にしないようにしたが、消えない違和感が心の隅に居座った。

「楓、これを」

政之が差し出したのは、赤い平打簪だった。

それには見覚えがあり、たしかその簪は――――――

「…百合（ゆり）、さまの…」

政之の母、百合の簪である。

楓は幼いころに会った百合を思い出した。凛とした美しさを持つ

お方。お優しい目をしており、全ての悲しみを包み込んでくれるような、そんなふうなお方だった。
百合は、政之が家督を継いだあとに亡くなってしまった。元々体が弱いほうで、あまり表に出ない方だったが、楓をとても可愛がってくれていた。亡くなった日には、楓は涙が出なくなるまで泣いたものだ。

「そう。母上の形見の簪だよ」
「なぜ私に…？」
「母上がよく言っていたんだ。これは自分の嫁入り道具だったから、いつか楓に渡してやりたい、って」

懐かしそうに目を細めながら話す政之は、今までに見たことがないくらいに笑みを湛えていた。

「死んでしまう前に、本当は渡したかったはずだけど、渡せてなかったから、俺から渡しておこうと思って」
「ですが、それは百合さまの形見ですから、政之さまが持っていた方が……」
「俺が持っていても仕方ないよ。楓が持っていたほうがいい。受け取ってあげて。母上の最後の意思なんだと思うから」

政之に握らされた簪を、楓はじっと見つめた。
きっとこれは、百合の思い出や意思が込められているのだろう。

「…大切に、させていただきます」

楓が言うと、政之は楓の頭を撫でて、「大切にするだけじゃなくて、さして見せてね」と言った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6868w/

凛トシテ咲ケル花ヲ愛シ・・・

2011年11月17日19時15分発行